

中日陽明學未止

紀念王陽明龍場之悟五百年

暨中江藤樹誕生四百年

主編——楊儒賓、馬淵昌也



臺大出版中心



中日陽明學者墨跡／楊儒賓、馬淵昌也主編。
--初版--臺北市：國立臺灣大學出版中心 2008〔民97〕
200面；29 * 21公分。
ISBN: 978-986-01-5039-1 (精裝) ISBN: 978-986-01-5040-7 (平裝)

1. 書法
2. 作品集

943.6

97015091

統一編號 1009702098

中日陽明學者墨跡

主 編：楊儒賓、馬淵昌也

策 劃 者：國立臺灣大學人文社會高等研究院、國立清華大學人文社會研究中心、
日本學習院大學東洋文化研究所、財團法人何創時書法藝術文教基金會

出 版 者：國立臺灣大學出版中心

發 行 人：李嗣涔

發 行 所：國立臺灣大學出版中心（<http://www.press.ntu.edu.tw>）

法律顧問：賴文智律師

執行編輯：吳國豪、陳怡勳、陳怡靜

釋 文：蔡明讚、陳宏勉、高明一、吳國豪

小傳說明：楊儒賓、阿部光麿、大場一央、松野敏之、中嶋諒

日文翻譯：渡邊賢、三澤三知夫、福岡さち子、阿部光麿、大場一央、松野敏之、
中嶋諒、青木俊介、倉嶋真美、村井綾、山喜代成、川嶋陶子

中文翻譯：張崑將、林永勝

書名題簽：陳怡靜集王陽明字

攝 影：林茂榮

作品提供：財團法人何創時書法藝術文教基金會、楊儒賓、陳啟德

出版時間：2008年9月初版

展 售 處：國立臺灣大學展售中心

地 址：10617 台北市羅斯福路四段1號

電 話：02-2365-9286

傳 真：02-2363-6905

E - m a i l：ntuprs@ntu.edu.tw

製版印刷：博創印藝文化事業有限公司

地 址：台北縣中和市中山路三段11號9樓-3

電 話：02-8221-5966

美術設計：陳自強

定價：新臺幣400元整(精裝) 新臺幣250元整(平裝)

GPN: 1009702098(精裝) GPN: 1009702099(平裝)

ISBN: 978-986-01-5039-1 (精裝) ISBN: 978-986-01-5040-7 (平裝)

著作權所有・翻印必究

中日陽明學永不止

紀念王陽明龍場之悟五百年
暨中江藤樹誕生四百年

主編

楊儒賓、馬淵昌也



中日陽明學者承止

東アジアの陽明學

馬淵昌也 4

王陽明『龍場の大悟』五百年及び中江藤樹誕生四百年記念国際學術シンポジウムと、特別展覧会「東アジアにおける陽明學」開催に際して

東亞陽明學

張昆將、林永勝譯 6

王陽明『龍場大悟』五百年暨中江藤樹誕生四百年紀念國際學術研討會暨「陽明學在東亞細亞」特別展覽會

五百年前的龍場驛之悟

楊儒賓 8

五百年前的龍場の悟り

渡邊 賢譯 10

簡介與宸濠之亂相關的三件書畫

何國慶 12

宸濠の乱と関係する三件の書画についての紹介

三澤三知夫譯 14

【中國學者】

01 陳獻章

草書七言詩軸 18

02 陳獻章

致林光書卷 19

03 李士實

行書雜詩卷 20

04 伍文定等

明人贈行詩卷 22

05 王守仁

草書致羅整庵卷 24

06 王守仁

草書詩帖卷 26

07 王守仁

草書詩卷 28

08 王守仁

行草手札冊頁 30

09 王守仁

行書致王老先生信札 31

10 湛若水

山水畫 32

11 陸深

行書致直齋老先生軸 33

12 舒芬

行草飲玉清宮作五律扇面 34

13 顧應祥

行書宿濂溪先生祠等雜詩卷 36

14 孫堪

見荷草廬圖軸 38

15 徐階

行草壽陸司馬北川（陸隱）之作立軸 39

16 羅洪先

楷書信札乙通 40

17 唐順之

行書致熙甫先生（歸有光）信札 41

18 徐渭

行書信札 42

19 祝世祿

行書偕王贊卿訪鄭山人山中軸 43

20 焦竑

行書致陸戶侯信札 44

21 湯顯祖

行草七言詩軸 45

22 郭子章

草書手卷 46

23 顧起元

行書致長白老丈信札 48

24 陶奭齡

行草信札 49

25 高攀龍

行書致六弟信札 50

26 高攀龍

行書致七弟信札 51

27 劉宗周

行書手札三通 52

28 魏大中

詔書卷 54

45 北島雪山
行楷手卷

75

東アジアの陽明学――

王陽明『龍場の大悟』五百年及び中江藤樹誕生四百年記念国際学術シンポジウムと、特別展覧会「東アジアにおける陽明学」開催に際して

学習院大学外国語教育研究センター教授 馬淵昌也

今年、二〇〇八年（平成二十年）は、十六世紀以降、中国・韓国・日本の思想文化に大きな影響を与えた「陽明学」の誕生と展開との関連でいうと、ある重要な年に当たる。まず、今年が、「陽明学」という、新しい儒教の理論的立場を打ち立てた王陽明（本名王守仁・1472-1528）が、様々な模索と挫折の末に、貴州省龍場という辺鄙な地での流謫の苦難の中で、独自の説を確立してから、ちょうど五百年にあたるのである。彼の説は、我々すべての人間の心の中に、完全に正しい善悪判断力が一百パーセントの明証性をもって顕現しているから、自己の内面を見つめて、道徳的良心として現れている、この「良知」と呼ばれる心の本体に従ってゆけば、我々は完全に天理に従った生き方が可能になるし、またそうしなければならない、とするものであった。

この思想は、南宋以来、儒教の主流であった朱子学が、我々普通人の心の判力は誤謬が多いので、儒教の経書を手引きに、事物の理をひとつづつ慎重に窮めていかなければならない、とする立場に対して、それにかわる正しい儒教の立場として提示された。「陽明学」は、十六世紀の中国の知識界を席卷

したが、明朝の滅亡とともに中国では大きな勢力となることはなくなった。しかし、その後も、中国・韓国・日本で、著作物を通じて断続的に、共鳴する儒教思想家を生み出し続けたのである。その意味で、王陽明による「龍場の大悟」は、思想的に大きな意義のある事件だったわけだが、今年は何よりそれから五百年目なのである。

そして、また興味深いのは、日本の江戸時代に、「陽明学」の影響を受けながら独自の思想を主張した、中江藤樹の生誕四百年にも当たるのである。中江藤樹（1608-1648）は、近江で活躍し、「近江聖人」との異名をとった儒教学者であるが、王陽明とその学派の著書を読み、影響を受けたので、一般に日本の「陽明学者」の「祖」とであるとされる。多面性をもつ中江藤樹の思想に対して、この表現が正しいか否かはともかく、江戸時代の学者で、最も早く「陽明学」の積極的受容を行った重要人物の一人であることは間違いない。今年、奇しくもその中江藤樹の生誕からも、四百年目なのである。

この事態を踏まえて、国立台湾大学人文社会高等研究院院長の黄俊傑教授、及び国立清華大学人文社

会研究センターの楊儒賓教授の二人より、表題に示した如く、「東アジアの陽明学―王陽明『龍場の大悟』五百年及び中江藤樹生誕四百年記念国際学術シンポジウム」と、特別展覧会「東アジアにおける陽明学」を同時開催したい、との依頼を、早稲田大学教授で陽明学研究者の永富青地先生を通じて、やはり陽明学を研究対象としている小生に頂いた次第である。両先生のお考えでは、「陽明学」を、中国・韓国・日本を主たる領域とする「東アジア」の共通の文化遺産と考え、その視点からの討論会を、むしろ華人圏以外の日本で開きたい、とのご意向であった。

折りしも、我が学習院大学では、東洋文化研究所の研究プロジェクトとして、小生が代表となつて「陽明学研究の現在」という題目の活動を行っている。また同時に、文学部鶴間和幸教授が代表者の、日本学術振興会アジア研究教育拠点事業の大規模なプロジェクト、「東アジア海文明の歴史と環境」も進行中であり、その一部会として小生が中心になつて東アジア陽明学関係でシンポジウムを企画しようという意図をもっていた。ここで、奇しくも台湾の

先生方のお考えと、小生ども学習院サイドの事情が符節を合すごとくに一致することとなり、学術討論会と展覧会という二つの企画を、本年九月に学習院で開催することになったわけである。そこで、学習院大学の鶴間教授主宰のプロジェクトと、台湾大学人文科学高等研究院の共同主催という形で、まず会議では、台湾・韓国・日本の方で、中国・台湾・韓国・日本の陽明学関連の諸問題をご研究の専門家の方々にお集まり頂き、議論を行うこととした。同時に、展覧会としては、中国・日本の陽明学に関連のある諸家の書の作品の展示、そして学習院大学図書館が所蔵する陽明学関係及び東アジアの知の交流に関連する書籍の展示を行うこととしたのである。

その過程で、特に特筆しておきたいのは、まず、会議関係については、企画の中心となった台湾の先生方及び小生ども学習院関係者以外に、この企画を唐突にご案内申し上げ、ご参加をお願いした韓国の成均館大学の先生方、そして日本の各大学の先生方が、二つ返事でご参加をご承諾下さったことである。本当に大変な多忙の中、無理なお願ひにも関わらず、ご参集頂けるとの御意向を頂けた各先生方のご厚意に、深謝申し上げる次第である。

また、展覧会については、台湾の何創時書法芸術基金会の方々のご厚意に深い感謝の意を表したい。同基金会は、中国歴代の名士の書作品を三千件も擁する文化機関だが、今回の展覧会の企画に際し、その意義を認め、所蔵品のうちより、特に陽明学と関係の深い名品を数十もえりすぐって貸し出して下さったのである。また、楊儒賓教授のご尽力にも、特別な感謝の気持ち述べたい。楊先生は、高名な学

者であるとともに、收藏家としても知られる方であるが、今回はご自身の所蔵品をご貸与下さるとともに、何創時書法芸術基金会との仲立ちの労もお取り下さったものである。

また、資金・設備面では、国立台湾大学人文社会科学高等研究院、国立清華大学人文社会研究中心、そして日本の昭和会館・文部科学省・日本学術振興会の諸機関、及びわが学習院大学の各部門のご協力を仰ぐことで、始めて本企画が可能になった。これも記して深謝したい。

さて、書作品の展示についていえば、いずれも陽明学、或いは王陽明個人と関係の深い著名人の作品だが、特に、王陽明の作品が多数展示されていることにご注目頂きたい。故宮博物院所蔵品を除いて、台湾現存のすべての王陽明の真蹟が一堂に会したもので、これは一大壮観である。就中、「答羅整庵少宰書」は、かの王陽明『伝習録』中巻に収載された書簡だが、「夫學貴得之心、求之於心而非也、雖其言之出於孔子、不敢以爲是也」との宣言を記した歴史的なものである。展覧会にお出かけの各位は、その真蹟を目睹できるわけであるから、これは極めて意義深いものがあるといわなければならない。

さて、本来、会議には、大陸の先生方もお招きしとて、考えていたが、財政面他の諸般の事情でお招きがかなわなかった。これは甚だ遺憾である。ただ、丁度十月には大陸の貴州省龍場で、龍場悟道五百年記念国際学術討論会が開かれる。これは、学習院での会議と相補的なものとなることが期待される、本格的な国際会議である。

また、展覧会では、残念ながら、韓国の陽明学関

連の学者の書を展示することができなかった。これも甚だ遺憾である。ただ、会議においては、韓国の陽明学が一つの中心的トピックをなすので、これは大きな特色といえよう。十一月には、韓国仁川市において、韓国陽明学会主催で、韓国の有名な陽明学者、鄭齊斗（霞谷）の思想を主題とした国際会議が予定されている。学習院での会議は、その序曲ともなろうかと考える。

いずれにせよ、今回の会議と、展覧会を通じて、学界各位、或いは広く江湖の方々が、陽明学というもの、東アジアでかつてもった意味を確認し、また東アジア共通の文化遺産として、今後の我々のありかたを考えてゆくひとつの契機としてとらえ直して頂ければ、これにまさる幸いはない。各位には、議論及び展示を、充分に堪能されたい。

二〇〇八年（平成二十年）八月十日

東亞陽明學

王陽明『龍場大悟』五百年暨中江藤樹誕生四百年紀念 國際學術研討會暨「陽明學在東亞細亞」特別展覽會

今年二〇〇八年（平成二十年），正值十六世紀以後影響中國、韓國、日本思想文化甚巨的「陽明學」之誕生與展開的重要之年。首先，王陽明（本名王守仁，1472-1528），歷經萬般苦難與挫折仍不斷探索，乃在被流放於邊鄙之地的貴州省龍場，確立了獨自的學說，這就是他的新的儒教理論立場的「陽明學」，今年剛好是第五百年。陽明的學說，認為在我們所有人類的心中，帶有截然正確的善惡判斷力，可以百分之百的直觀體證而顯現，只要我們凝視自我的內面，作為道德的良心將顯現而出。若遵從這個被稱為「良知」的心之本體，則我們依從天理的生存方法，是完全可能的，而且必須要如此。

陽明的思想，是針對南宋以來儒教主流的朱子學而發，朱子學認為我們普通人的心之判斷力會含有很多不正確的因素，因此我們不能直接信任它，必須以儒教的經書作為參考典範，慎重地窮盡每一件事物之理。陽明的思想便是要改變朱子這樣的學說，從王陽明本人來說，這樣纔算是正確的儒教立場。「陽明學」雖然席捲十六世紀的中國知識界，但在明朝滅亡的同時，失去其龐大的勢力。不過，透過他的著作，此後在中國、韓國、日本仍不斷地有與之共鳴的儒教

思想家興起。以此觀之，王陽明的「龍場大悟」事件在思想史上是具有重大意義的，而今年剛好就是「龍場大悟」後的第五百年。

此外，令人感到興趣盎然的是，在日本江戶時代，一方面受到「陽明學」的影響，一方面又擁有獨創思想的中江藤樹（1608-1648）也剛好誕生四百年。中江藤樹活躍於近江，且是一位得到「近江聖人」之名的儒教學者。他因讀王陽明及其學派的著作且深受其影響，被視為日本的「陽明學」之「祖」。中江藤樹之思想是多面向的，所以不管上述的評價是否正確，在江戶時代的學者中，藤樹確實是最早積極地接納「陽明學」的重要人物之一。今年恰好也是中江藤樹誕生的第四百年。

根據以上所述，國立台灣大學人文社會高等研究院的院長黃俊傑教授及國立清華大學人文社會研究中心的楊儒賓教授二人，乃提議籌劃「東亞陽明學——王陽明『龍場大悟』五百年暨中江藤樹誕生四百年紀念國際學術研討會」；並且希望同時舉行「陽明學在東亞細亞」特別展覽會。此事透過在早稻田大學教授陽明學的永富青地先生提出來，最後則由研究陽明學的我就來執行此案。兩位教授認為「陽明學」是中國、

學習院大學外國語教育研究中心教授 馬淵昌也

（張昆將、林永勝譯）

韓國、日本為主的「東亞」的共同文化遺產，從此一觀點著眼，研討會希望能在華人圈以外的日本召開。

剛好，我在學習院大學東洋文化研究所的研究計畫，正在進行「陽明學研究的現在」之計畫。而且同時，文學部鶴間和幸教授所代表的日本學術振興會亞洲研究教育據點事業的大規模計畫也正在進行「東亞海文明歷史與環境」的主題，其中一部分是我構想要主辦的東亞陽明學相關的研討會計畫。台灣教授們的想法剛好與我在學習院方面的事情一致，若合符節，所以學術研討會和展覽會兩件事情才會決定於今年九月在學習院舉辦。以學習院大學鶴間教授所主持的計畫和台灣大學人文社會高等研究院共同主辦的方式舉行，首先在會議方面，我們將邀集在台灣、韓國、日本對陽明學相關諸問題的研究專家進行討論；同時，在展覽會方面，將展示有關中國、日本陽明學者的書法作品，同時也展示學習院大學圖書館所藏有關陽明學及東亞知識交流的著作。

整個籌劃的過程，頗有可記者。首先，關於會議成員方面，除了計畫核心成員的台灣教授以及我們學習院的同仁之外，還有乍知此提案，倉促間受邀參加的韓國成均館大學以及日本各大學的教授們，能在百

忙中撥空參與之雅意，謹致上誠摯的謝意。

其次，有關展覽會方面，對於何創時書法藝術基金會的各位協助者之厚意，本人也深表謝意。該基金會擁有約三千件的中國歷代名士的書法作品，在籌劃這次的展覽會時，該基金會認可此檔展覽之意義，所以從他們的收藏品之中，特別選出數十件與陽明學有深刻關係的名品借展。再者，對於楊儒賓教授盡心盡力，在此也要致上特別的感謝之意。楊教授是知名的學者，同時也是廣為人知的收藏家，這次除借出自己的收藏品外，更在協調與何創時書法藝術基金會之間的事務上，付出相當多的精力。

此外，在資金、設備方面，承蒙台灣大學人文社會高等研究院、清華大學人文社會研究中心、日本的昭和會館、文部科學省、日本學術振興會等機構，以及我們學習院大學各部門的鼎力協助，本企业畫才得以順利進行，在此一併銘記致謝。

本檔展示的書法都是和陽明學或和王陽明個人關係很深的著名人物之作品，特別值得注目的是王陽明

本人的多件書作。台灣現存的全部王陽明的真蹟，除了故宮博物院的收藏品外，大概都將於此展覽會上聚集一堂，真是壯觀。其中，書簡〈答羅整庵少宰書〉被收錄在王陽明《傳習錄》中卷，記載著「夫學貴得之心，求之於心而非也，雖其言之出於孔子，不敢以為是也」的歷史性宣言，出席展覽會的諸君可以目睹這篇真蹟，這當是極富深刻意義的事情。

本來這次會議預計邀請大陸學者與會，但考慮財政及其他的事務，以致無法邀請與會，甚感遺憾。但是，剛好十月在大陸的貴州省龍場將舉辦龍場悟道五百年紀念國際學術討論會，這是場正式的國際會議，和學習院的會議可以互補，我們期待甚殷。

這次的展覽會很可惜的未能展示有關韓國陽明學者的書法，相當遺憾。然而，在會議方面，韓國陽明學是本次會議的主題之一，可說是很大的特色，而且十一月韓國陽明學會預定在韓國仁川市主辦一場以韓國著名的陽明學者鄭齊斗（霞谷）的思想為主題的國際會議。此次學習院的會議，或許可視為其序曲。

總而言之，期待學界各位先進與廣大的社會人士，能透過這次的會議和展覽會，再次確認陽明學曾經在東亞代表的意義，以及省思作為東亞共通文化遺產的陽明學所提供的契機，以便我們重新思考今後的作為。也盼望諸君能充分地體會會議中的議論，並賞玩展覽作品。

二〇〇八年（平成二十年）八月十日

五百年前的龍場驛之悟

楊儒賓

一五〇八年，明正德三年，歲在戊辰，王陽明三十七歲。這位身值壯年的中下階層文官因得罪權傾一時的宦官劉瑾，被貶到大明西南一隅的貴州龍場驛，擔任驛丞這麼不起眼的芝麻小官。龍場之於王陽明，就像潮州之於韓愈，瓊州（海南島）之於蘇東坡。這些蠻荒之地不只在地理意義上與世隔絕，對流放者而言，它還意味著與價值所聚的文明（王化）隔絕。王陽明在此一時期寫的一篇名文〈瘞旅文〉中說道：龍場此地，「幽崖之狐成群，陰壑之虺如車輪」。《年譜》也說道：王陽明此時只能和「蛇虺魍魎、蟲毒瘴癘」共同居住——蛇虺魍魎是不該居住到人的環境來的。誠如耶律亞德（M. Eliade）一再指出的，蠻荒往往意味著尚未秩序化，用《易經》的語言講，「未秩序化」也就是還沒有「人文化成」。顯然，正德年間的龍場不屬於中土人士理解的人文世界，它屬於另一種存在的次元。

但從文明撤退到荒野，往往是歷史性人物改造文明的必經之路。耶穌與釋迦在成道之前，都曾經退居到荒野，在孤寂中承受各種的試煉。王陽明亦然，當他深陷車馬不通、言語不通的窘境時，惟一能信賴的，大概只有絕不妥協的自由意志。他從少年起就關

心的「第一等人」之學仍不斷的咬噬其心胸，而作為人生終極關懷的生死問題此際又適時的迎面罩來。就在四方緊壓的狹窄心理空間中，王陽明一無依傍，日夜靜坐，覃思義理，甚至以石墀自隨，思求突破。就在山窮水盡之際，忽然一夜若聽到空中有人傳語聖諦，他一躍而起，乃大悟格物致知之理。後來，他以深夜所悟者印證儒門經典，發現無一不合。從此他走上了一條與主流的朱子學分道揚鑣的道路，後世學者跟隨他的足跡邁進者，絡繹不絕，東亞世界此後多出了王學一派。

悟總是一剎那，王陽明於公元一五〇八年某深夜所經歷的一剎那，卻是五百年來思想史上最關鍵的一刻。黃宗羲說：王陽明之前的中土知識界相當封閉，幾乎眾口一聲，此亦一述朱，彼亦一述朱，氣氛沈鬱得不得了，「自姚江指點出良知人人現在，一返觀而自得，便人人有個作聖之路。故無姚江，則古來之學脈絕矣！」黃宗羲的觀點繼承劉宗周而來，劉、黃的論點當然也不是自我作古，而是遠有所承，王學中人都是這樣看的。他們認為陽明的龍場驛一悟，就像保羅在大馬士革的路途上看到耶穌顯靈一樣，這種獨特的精神體驗是關鍵性的，它給體驗者帶來了生命徹底

的翻轉。這種獨特的精神體驗也是革命性的，因為文化巨子自家性命的體證往往激發了一代的思想風氣，其作用還會波延到後代的子子孫孫。

王陽明的龍場之悟的影響之大，是難以估量的。從公元十六世紀中葉以後，王學火速傳播，它滲透到大明帝國的每一塊文化領域上去，成為當時文化氛圍中最具活性的要素。王學直接對衝朱子學而來，我們知道：在朱子的系統中，心與理一直維持緊張的關係，心不是理，但心可具萬理。然而，具萬理的心之「具」乃是潛具，學者要了解自家的心具萬理，亦即要了解自家的本來面目，他必須一方面即物而窮其理，一方面主敬，動靜交加涵養，以期有「豁然貫通」之一日。簡言之，在泛存論（理遍一切）的基本格局籠罩下，朱夫子的道德實踐走的是「漸教」之途徑，是「合」內外之理之路。這是條路程悠遠而目標無從事先確定何時可以抵達的朝聖之旅，每個人只能在旅途中不斷的摸索，捱來捱去，以期有一天能突然「豁然貫通」，了知萬物之「所以然」與「所當然」。朱子心理關係的主軸不是認識論意義的，而是解釋「真正的自我」的核心概念。心如明鏡止水般的涵攝眾理，這是朱子學的「復性」境界，也是朱子學

所認識的「自家本來面目」。

從陽明的觀點來看，格物窮理乃是求理於外，求理於外即所謂的「義外」。從孟子以降，「義外」被視為一種他律的道德，「義外」的活動被視為是對道德實踐主體的背叛。王陽明從龍場驛走出來之後，慢慢的形成一種以「致良知」為核心的道德實踐，「良知」被視為是作為人的本質的本心，它也是宇宙的本體。良知人人具備，當下即是，人人都可依良知承體起用，都可在每一剎那碰觸到道體的脈動。所謂的「致良知」之「致」，其實質接近孟子學的「擴充」之義。王學的「良知」概念是朱子學無法接受的，朱子生前對直接體證本心的工夫，如「察識」或「識心」之說，極為警惕。對不受天理軌約的心體貫穿於全身的活動，更視為是禪宗式的「作用是性」。他大肆批判，不遺餘力。但歷史很弔詭，朱子的事先防範之言反而像是一組啟示未來的預言。大約三百年後，王陽明繼起。王學在相當的程度內，顛倒了朱子學的實踐圖式，他將朱子學證成的終點（本心流行）當作實踐的起點，朱子生前的擔憂此際變成活生生的現實。

本體或本心的追求是理學的共識，在宋儒的系統

中，周敦頤的「主靜」與程朱的「主敬窮理」是兩種不同的典範，前者走逆覺的體證，這種工夫「靜」的成分很明顯。明儒受周敦頤影響者，如江右學派中人，也都有偏於「靜」的傾向。程朱的主敬窮理，則融意識活動的「主一」與體認活動的「窮理」於一爐，這樣的工夫注定了悠久的漸教性格。王學與宋儒的兩種學問性格都不相同，它的良知側重當下，動能特強。良知即知即行，情意知合一；即內即外，意識活動與意識活動所向之「物」同得其正。如果類比佛教的例子，王學可謂儒學的禪宗。但王學的良知概念現世性更強，意志力更強，所以它所帶來的解放與破壞效果也更明顯。即以學習而論，朱子臨終前，還苦勸學生們「大家倡率做些堅苦工夫，須牢固著腳力，方有進步處」；王學發展高峰的王畿（龍溪）論良知之發展，則言「此世出世法，無足而至，無翼而飛，誠非挈雲攀電手，不足以了此一著。」從朱子學到王學，可以說從「牢固腳力」到「無翼而飛」的轉換。

王學興起後，東亞的儒學世界才有大規模的分流現象。王學與朱子學兩者的風格截然不同，影響也迥異。造成這種同源異流的發源時地，就在正德三年龍場驛的某一個寂靜夜晚的覺悟之剎那。

五百年前の龍場の悟り

楊儒賓（渡邊 賢訳）

一五〇八年、明の正徳三年、戊辰の歳、王陽明は三七歳である。この壮年の中下級文官は当時権勢を一身に集めていた宦官劉瑾に罪を得、大明帝国西南片隅の貴州龍場駅に貶せられ、駅丞という目立たぬ芥子粒ほどの小官に任ぜられた。王陽明における龍場は、恰も韓愈における潮州、蘇東坡における瓊州（海南島）に似ている。これらの蛮荒の地は単に地理的に世と隔絶するだけではなく、流刑者にいわせれば、価値の集積である文明（王化）から隔絶することをも意味している。王陽明はこの時期に書いた一篇の名文「瘞旅文」に、龍場の地は、「幽崖の狐群を成し、陰壑の虺車輪の如し。」という。『年譜』にもまた、王陽明はこの時「蛇虺魍魎・蟲毒瘴癘」と共に居住するより他ない、という——蛇虺魍魎は人間の環境に居住することが許されぬものだ。M・エリアーデ（M.Eliade）が繰り返し指摘するように、蛮荒は往々にして秩序化以前を意味しており、『易経』の語で述べれば、「秩序化以前」とは「人文化成」に依然及んでいないことに他ならない。明らかに正徳年間の龍場は中土の人士が理解する人文世界に属さず、そこは異次元に属していた。

しかし文明から荒野への後退は、往々にして歴史

的人物が文明を変革するために通らねばならぬ路である。イエスとシヤカとは会得以前に、いずれも荒野にあつて、孤寂のうちに様々な試練を受けている。王陽明も同様である。彼が車馬も通わず、言語も通ぜぬ窮境に陥った際、唯一信頼できるのは、恐らく決して妥協することのない自由意志だけであつただろう。彼が少年時代より抱いていた「第一等の人」の学は絶えずその胸中に食らい付き、人性終極の関心事である死生の問題もこの境遇の中ここぞとばかりに正面から覆いかぶさつてきた。四方を硬く閉ざされた狭窄した心理空間にあつて、王陽明は何の拠り所もないまま、日夜静坐し、深く義理を思い、石棺に自ら納まるまでして、思索し貫いた。行き詰まって身動きもとれぬ中、一夜空中に何者かが聖諦を告げるのを聞く、彼は飛び起きた、格物致知の理を大悟したのだ。その後、彼は深夜に得た悟りを儒家經典に照らしみると、すべて合致していることが分かった。これより彼は主流であつた朱子学とは別の道を歩むことになるが、後世の学者で彼の足跡を追って邁進する者は、途絶えることなく、東アジア世界に多くの王学一派を輩出した。

悟りは常に一刹那であり、王陽明が西暦一五〇

八年のある深夜に経験したのも一刹那であるが、五〇〇年来の思想史上において最大のキーとしての一瞬なのだ。黄宗羲は、王陽明以前の中土知識界が相当逼塞しており、誰もが異口同音に朱子学を語り、沈鬱極まりない空気の中、「姚江指して良知の人人に現在するを点出してより、一たび返観して自得すれば、便ち人人個の作聖の路有り。故に姚江無くんば、則ち古来の学脈絶ゆ。」という。黄宗羲の観点は劉宗周を承けたもので、劉・黄二氏の論点はもちろん彼らの独創というわけではなく、由緒は古く、王学人士に共通する観点である。彼らは陽明の龍場駅における一悟を、パウロがダマスカスへの途上イエスの啓示に遭遇したことのように見なしており、かかる独特の精神的体験は關鍵としての性格を有し、それは体験者に生命の徹底した転換をもたらす。かかる独特の精神的経験は革命的なものでもあり、文化的巨人自身による性命の体証は一代の思想潮流を誘発するものであるから、その作用はさらに後代の子々孫々にまで波及するはずである。

王陽明の龍場における悟りの影響の大きさは、量り難い。西暦十六世紀中葉より以後、王学は急速に伝播し、大明帝国におけるそれぞれの文化領域に浸

透し、当時の文化的ムードの中最も活性を有する要素となった。王学は朱子学に直接対峙することにより発した。周知のとおり、朱子学の体系において、心と理とはひたすら緊張を維持する関係であつて、心は理ではないが、心は万理を具えている。しかし、万理を具える心の「具」とは潜具（潜在的な具、したがって表面には現われない―記者）であり、学者は自身の心が万理を具えていることを理解せねばならず、また自身の本来面目（本来性―記者）を理解せねばならない。一方では物に即して其の理を窮め、一方では敬を主とする、動静双方の涵養により、何れの日にか「豁然貫通」有るを期するのだ。要するに、普遍的存在論（理は一切に遍在する）の基本構造の枠内において、朱夫子の道德実践の歩みは「漸教」の途上、内外の理を「合する」路上にある。これは道程は遙かに遠く、目標は予定されておらず、何時到達できるか知る由もない作聖地巡禮の旅なのであつて、個々人にできるのはただ旅の途上に不断に模索し続けること、そして突然「豁然貫通」し、万物の「所以然」と「所当然」とを了解し得る日の到来を期するより他ほかない。朱子の心・理関係の主軸は認識論にあるのではなく、「真正の自我」の核心的概念を解釈することにある。心が明鏡止水の如くに衆理を包摂すること、これが朱子学における「復性」の境位であり、朱子学が認識する「自家本来面目」でもあるのだ。

陽明の観点からみれば、格物窮理は理を外界に求めることであり、理を外界に求めるのは所謂「義外」に他ならない。孟子以降、「義外」は一種の他律道德と見なされ、「義外」の活動は道德実践の主

体に対する背反とも見なされる。王陽明は龍場駅から解放されて以後、徐々に「致良知」を核心とする一種の道德実践を形成してゆくが、「良知」とは人間の本质としての本心であり、また宇宙の本体であると思なされる。良知は人人みな具備し、当下（ただし）に是（適正）であり、人はみな良知によつて本体を作用として發揮することができ、みなそれぞれの一刹那において道体の脈動に接することができのだ。所謂「致良知」の「致」は、実質上孟子学の「拡充」の義に親近する。王学の「良知」の概念は朱子学の容認し得ぬものであり、朱子は生前直接本心を体証する工夫、例えば「察識」や「識心」の説に対し、極めて警戒していた。天理の規範に保証されない心体が全身を貫く活動に対しては、禅宗の「作用是性」であると思え見なした。彼の公然たる批判は、余力を遺すところがない。しかし歴史とは奇妙なもので、朱子の予防の言はかえつて一連の未来を啓示する予言のようである。およそ三〇〇年後、王陽明が起こる。王学は相当程度の範囲において、朱子学の実践図式を顛倒してしまい、彼は朱子学の証成した終点（本心の流行）を実践の起点とみなし、朱子生前の憂慮はここに生々しい現実となった。

本体あるいは本心の追求は理学の共通認識であり、宋学の体系にあつては、周敦頤の「主静」と程朱の「居敬窮理」が二種の異なる典範である。前者は逆覚を歩む体証で、この種の工夫の「静」の成分は明確である。明儒で周敦頤の影響を受けるのは、江右学派の人士を挙げられ、彼らはいずれも「静」に偏向している。程朱の居敬窮理は、意識活動であ

る「主一」と体認活動である「窮理」を一炉に融解する、かかる工夫は必然的に悠長な漸教的な性格となる。王学と宋学と、二様の学の性格はいずれも異なっており、その良知は当下を偏重し、エネルギーに満ちている。良知はとりもなおさず知であり行であり、情・意・知は合一する。すなわち内は外に他ならず、意識活動と意識活動の対象である「物」とは共にその適正を得る。仏教を比喩に挙げるなら、王学は仏教における禅宗であるといひ得る。ただ、王学の良知概念は現世的性格、意志力がより強固であり、したがってそれがもたらす解放と破壊との効果もより明確である。学習についていえば、朱子は臨終まで、なお学生たちを鼓舞して「大家倡率して些の堅苦の工夫を做せ、脚力を牢固にし着するを須ちて、方めて歩を進むるの処有らん。」といった。

王学展開の頂点にある王畿（龍溪）は良知の発展を論じ、「此れ世出世の法なり、足無くして至り、翼無くして飛ぶ、誠に拏雲掣電の手に非ざれば、以て此の一著を了するに足らず。」という。朱子学から王学は、「脚力を牢固にす」から「翼無くして飛ぶ」への転換といふことができる。

王学が興起した後、東アジアの儒学世界は漸く大規模な分流現象を見る。王学と朱子学との両者の風格は截然と異なり、影響にも隔たりがある。かかる同源異流を惹起する発端となった時と場とは、正徳三年龍場駅のある寂とした一夜の覚悟の刹那にあるのだ。

簡介與宸濠之亂相關的三件書畫

何國慶

王陽明為曠代偉人，他既是有明一代影響後世最深遠的哲人，也是有明一代文人中武功第一者。祝世祿說他「在事業，有佐命之功；在學問，有革命之功。」影響他學問革命之功的關鍵，當是他三十七歲於龍場驛之大悟；至於成就他一生佐命之功的巔峰，應當是他四十八歲時，以客卿身分，徵集江西官兵，於三十五日內，平定來勢洶洶的宸濠之亂。

宸濠之亂發生於武宗正德十四年，為了覬覦膝下無子的武宗的天子位置，宸濠使盡了一切力量。先是想用和平繼承的辦法，繼承大位；和平不成，乃舉兵造反。宸濠造反失敗，大量文獻散佚掉了，我們後世所能見的，大抵只是勝利一方的說辭，宸濠方面的文獻絕難看到。即使僅就官方資料而言，由於年代久遠，能提供實質幫助的文獻其實仍是相當的有限。

此次展覽有三件文物與宸濠之亂有關聯，其中兩件為本基金會藏品，第三件為私人收藏。這三件文物內涵似乎還沒有公佈過，所以它們的價值也還沒有受到重視。

第一件作品為基金會收藏的一幅大中堂〈見荷草廬圖〉，圖中畫一草堂，草堂前有一荷花池，池畔有鶴雙舞。此畫作者不知何人，但圖畫上方有孫堪其人寫一長文記之，文末云：「敬圖識以復」。孫堪善畫，尤善菊花，則畫家當為孫堪。孫堪長文描述有一

龔姓士子在其父親過世後，築一草堂紀念之，前後十六年，如對其父。後龔生中舉，須至外地任官，龔生乃請畫家畫此草堂圖，希望日夜相對，以代實物。在此圖下方，另有孫堪其人寫一七律，孫陞其人寫一五古。兩詩一文皆作行草，皆用以詠歎龔生之孝思。

〈見荷草廬圖〉尺幅甚大，畫也精緻。但畫家名氣不甚響亮，另外有款識的兩人也不是名垂青史的重要人物，因此，此圖沒有受到太多的青睞。然而，孫堪、孫墀、孫陞三人乃孫燧的兒子，孫燧於正德年間任巡撫史，巡視南昌，恰值宸濠舉兵，孫燧不從也不降，遂被殺。宸濠之亂平定後，朝廷為之封官、謚號、立祠祀之。孫燧也是浙江人，與王陽明及胡世寧鄉試同榜。王陽明《年譜》於弘治五年條下，記載王陽明在試場時，夢見兩位巨人東西立，說道：「三人好作事」。三人好作事者，胡世寧舉發宸濠之奸，孫燧死難，陽明平定之。陽明此夢相當有名，明人文集記此事者甚多。孫燧不知還有沒有墨跡殘存天壤間？但他的三位兒子之墨跡得以共存一畫之內，這也可算是勝事殊緣。

孫堪、孫墀、孫陞三人雖無聞於今世，其事蹟實有可記者。孫堪乃嘉靖五年（1526）之武狀元，善於騎射。宸濠作亂時，孫堪聞其父被害，即率其弟孫

墀、孫陞二人，趕赴南昌，負骸歸葬，於墓旁結廬茹素三年，又墨衰三年，史家讚譽之為三孝子。〈見荷草廬圖〉作於嘉靖廿六年，距離孫燧殉難接近卅年。孫堪文中說道：龔生所以請他撰文，乃因兩人「同此永思之抱」。孫家兄弟皆有孝名，龔生所託，正得其人。

第二件作品為基金會收藏的〈明人贈行詩〉，此幅作品收十位明人詩作，最後一首提到其詩乃贈予「渭川子」者，「渭川」此一詞語在其他詩作中也一再出現。綜覽全文，十位作者所作，應該都是贈給渭川子此人的送行詩。考「渭川」，乃東漢（147-154）之號。東漢為陝西華州人，「渭川」或與家鄉山川有關。東漢為弘治舉人，後任九江、南昌知府。東漢此人，《明儒學案》及《王文成公全書》皆未見其名，但本卷作品中有一首詩注說道：「君近學於陽明先生」，則東漢為陽明弟子，可確定無疑。陽明弟子眾多，若東漢此種例子者，恐還不少。

本卷收錄十位明人的作品，十位明人依序為陳策、伍文定、蔣曙、邵銳、嚴紘、徐璉、鄒輓、田龍、陳墀、陸溥。伍文定與徐璉為陽明舊屬，曾從陽明討伐江西匪寇，也是陽明討伐宸濠時最得力的助手。事發當時，伍文定任吉安知府，徐璉任袁州知府。陳策曾任江西左布政使，邵銳任提學僉事，都與

陽明共事過，《王文成公全書》中可見到此四人之行跡；其餘六人如：蔣曙（江西右布政使）、陳墀（雲南副使）、鄒輓（廣西布政司參議）、嚴紘（廣西左布政使）以及東漢本人等，也皆與江西、廣西二地頗有地緣關係。這十人寫的詩作內容可相互參照，其寫作年代應該是在宸濠亂平不久、嘉靖皇帝剛上任之際，觀伍文定詩云：「九重新主來恩詔，四海遺黎動關歌」；邵銳詩：「聖主頒新詔，疲戈罷宿逋」，可見一斑。

第三件與宸濠之變相關之文物，乃前人劉樹堂誤題為「紫陽遺墨」之長卷詩作。作品長達二十一公尺（不含引首與跋文），文末有董其昌跋「朱文公書」，字印皆真。董其昌跋語後，葉德輝、黃自元、

俞樾、王先謙等人皆同聲呼應之。如果此卷真為朱文公所作，則此幅作品恐當為文公書法第一，其價值或在台北故宮所藏大字〈繫辭傳〉之上。然而，細觀董其昌跋語，不難發現其語與前面之詩作不屬同一張絹，兩者乃拼接而成。且詩作後面分明有落款：「桃花嶺山人」，且有印章「白州」、「若虛」、「御史大夫」等。考「若虛」乃李士實之字，李士實曾任都察院右都御史，有《白洲詩集》行世，且所居在桃花嶺，則桃花嶺山人何人，固已呼之欲出。

李士實其人久已湮沒風塵之中，平生事蹟若存若亡。然而，寧王宸濠當日舉兵造反，奉李士實為太師，李士實可說是叛亂集團中第一號謀士。圍繞宸濠周邊的人員，不管論資歷、論官階、論人脈，恐怕沒

有人超越李士實。李士實所托非人，宸濠兵敗被殺，事遂為天下笑。然李士實平生至交，如李東陽、劉大夏等人，皆為正人，朝廷支柱。且其墨跡飛白分叉，野趣橫生，非常典型的白沙茅龍筆法。考陳白沙文集，即多與李士實交往之詩作。看來李士實干冒滅族風險，從宸濠舉兵，恐怕還有些曲折的情節。宸濠未必是莽撞之君，跟隨者也未必全是投機之士。

傳世的書畫作品，除了藝術欣賞之外，有時亦可發揮史料佐證的功能。以上對這三件和宸濠之亂相關的書畫作品所做的歷史簡述，希望對此次陽明學展覽略盡棉薄之力，並希望此次陽明學展覽能對學術界激起更大的漣漪。

※ 本文從搜集原件、釋文到寫成文章，經眾人之手而成，筆者只算是代表人。

宸濠の乱と関係する三件の書画についての紹介

何國慶（三澤三知夫譯）

王陽明は明代においてならぶもののない偉人であり、明代の、後世に対して最も深い影響をもたらした哲人であり、明代の文人中、武功第一でもある。祝世祿は王陽明について次のように言う。「事業に

おいては明朝を助ける功があり、学問においては革命の功がある」と。その学問の革命に影響を与えた鍵は、三十七歳のときの龍場駅の大悟にあると考えられる。彼が明朝を助ける大功をなしとげた時は四十八歳であり、客卿の身でありながらも江西の官兵を集め、三十五日で勢い汹汹たる宸濠の乱を平定した。

宸濠の乱は武宗の正徳十四年に起きたが、男子のない武宗の帝位をわがものとする大望のため、宸濠は自分の全知全能を使いつくした。まずは政治的手段によって皇位を得ようとする方法をとったが、成功しなかった。挙兵し造反した。宸濠の造反は失敗に終わり、大量の文献が失われたので、後世の者が知ることのできるのは大抵、勝利した側の言説のみであり、宸濠側の文献はほとんど見られない。また官側の資料といっても年代的にかけ離れたものであり、実質的に意味のある文献となりうるものは非常に限られている。

今回の展覧では、三件のものが宸濠の乱と関係を持つものである。そのうちの二つは基金会の所蔵であり、もう一つは個人の所蔵である。これらの三件

はまだ公開されていないといつてよく、それ故、その価値は重視されなかった。

一つめのものは基金会所蔵する一幅の大きな客間用の書画である『見荷草廬図』であり、図中には一つの草堂が描かれており、草堂の前には一つのハスの花があり、池の畦には鶴が二羽、舞っている。

この書画の作者は不明であるが、ただ画の上方に孫堪が書いた長文が記されており、文末には「敬しみて図識以て復す」とある。孫堪は画をよくし、菊花を最も得意としていたから、画家は孫堪である。孫堪の長文には次のようにある。姓が龔という士人が父親を亡くした後、草堂を築き、父を偲ぶよすがとし、十六年間、父がいますが如しであった。後、龔生が科挙に合格し、郷里を離れて任官しなければならぬとき、画家にその草堂を描くことを請い、日夜相対する画の中の草堂を実物のかわりにしようとした、と。画の下方には孫墀の七言律詩があり、孫陞の五言古詩がある。二つの詩は行書と草書の間での書体を用いており、いずれも龔生の孝心を詠嘆したものである。

『見荷草廬図』は非常に大きく、筆鋒は精緻である。ただ作者の名声はそれほどのもではなく、また款識の二人も青史に名を残すような有名な人物ではないので、この図はそれほど重視されなかった。しかし孫堪・孫墀・孫陞の三人は孫燧の子であり、

孫燧は正徳年間、巡撫史に任ぜられ、南昌を巡視した時に宸濠の挙兵にあい、従属もせず投降もせず、殺された。宸濠の乱が平定された後、朝廷は孫燧に官を封じ、おくりなをあたえ、ほこりを立て祀った。孫燧も浙江人であり、王陽明・胡世寧と同年で郷試に合格した。王陽明の『年譜』弘治五年の條には、王陽明が郷試の試験場において、夢の中で二人の巨人が傍らに立ち、「三人が良く事に当たると言われた、とある。三人が良く事に当たると言われるは、胡世寧が宸濠の叛乱を上書して訴え、孫燧が殉難し、陽明が平定したことをいう。陽明のこの夢はかなり有名であり、明人の文集ではこれに言及することが非常に多い。孫燧についてはその墨跡がまだ残っているかどうかは定かではない。だが孫燧の三人の子の墨跡は『見荷草廬図』に共存しており、これはすばらしい事であり不可思議の縁といえよう。

孫堪・孫墀・孫陞の三人は現在においては忘れ去られてしまったが、その業績は記すべきものがある。孫堪は嘉靖五年（1526）の武挙の状元であり、騎射を善くした。宸濠の叛乱の時、孫堪は父が害されたのを聞き、ただちに孫墀・孫陞の二人をひき連れ、南昌に急行し、骸を背負って帰り葬り、墓の傍らでいおりをかまえ素食すること三年、黒色の喪服を着ること三年であり、史家はこれをほめたたえ三孝子とした。『見荷草廬図』は嘉靖二十六年の